

平洲博愛容衆、不與人忤、虔誠尤厚、小河仲栗、飛鳥子靜同居多年、仲栗子靜各卜居、後仲栗歿而無所歸、於吾殯、喪祭若家人、且妻兒皆依賴焉、子靜又歿而無所歸、喪祭之猶仲栗養妻兒於家、後爲其女子整資裝嫁之人、仲栗子鼎長薦之尾府、食祿儒官、又南宮大漱子齡、大漱歿後、與其母氏皆依賴焉、齡長薦之尾府、又食祿儒職云、其他寓塾者雖斗筲之人、若有歿者、憫寄寓異鄉而死於客中、久後遂失其葬埋之所在、自出費用立碑於葬所以記其姓名者數十人云。

(續近世叢語一德行)紀平洲寓長崎也、與小河天門、飛鳥圭洲俱結交爲兄弟、居三年、聞母疾、卽日東歸、歸則母旣歿、哀毀嘔血、臥病歲餘、獨恐資產漸盡而使父憂、寄二子書、以借百金、圭洲謂天門曰、吾能以百金助世馨之孝、固非所惜也、卽盛以匣、而題曰石、以報平洲。

(近世叢語二德行)或許子則○佐救人之急、俄背之、子則不復言、陰質宅與之、其人後聞之大驚、還子則、子則曰、人失信于我、我無如之何、我失信于人、豈得謂無如之何乎、見其叩謝不已而後受、

續近世畸人傳二子松源八

子松源八時達は出雲の家士、射藝の師也、老て山心と號す、爲人方正淳朴比類なし、若年の時、兄の過失に連坐せられて祿を離れ、國內大原郡に蟄居し、家貧なれば日雇して衣食を給す、その居宅の隣に農夫茄子を種ゆ、源八は菜を作る地なければ、これに就て茄子を買んとこふに、農夫たゞひとりめさんほどは、日々といへどもいくばくのことかあらん、たゞ我もの、ごとく取用る給へとて價をうけず、是より後、源八、茄子を喰んと思ふ時は往て取價錢をその莖に結付て去、圃主所々に錢のかゝれるを見てあやしみ、此人の所爲ならんと取集て返とも固く辭してうけず。

略 凡人に詐はなしとして、魚菜を買にも價を下せといふことなし、我心に應すれば買、應せざれば買ず、久して商人も是を傳へしりて、其家にては價を二ツにすることなし、其家に使ひ、奴婢も、其風に化して質朴にして詐らねば、そこに使はれしものといへば、人争ひて召抱たり、